

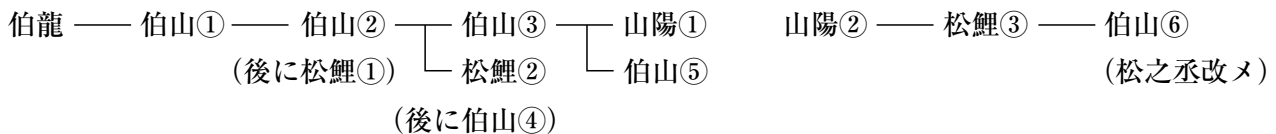
「落語と私」 その式拾六

三代目 橘ノ百圓

さて、落語の四季も終わり、次に何を書こうと思った処に、この度、現在講談界第一の人気者、松之丞さんが、六代目神田伯山と言う大名跡を継ぐ事となったので、落語と講談について語ろうと思います。

先ず、この神田伯山と言う名前について書きます。皆様もこの処、テレビ、ラジオ、その他マスコミで良く耳にしますから、すでにご存知の事と思いますが、伯山と言う名は、神田派の頭で、実に44年ぶりの復活になります。2月11日新宿末廣亭を皮切りに、長い襲名興業が始まる訳ですが、六代目を名乗る元松之丞さんは、本名、古館克彦、昭和58年東京生れ、平成23年11月に、現人間国宝の三代目神田松鯉先生(講談の尊称は先生、噺家は師匠です。何ンとなく講談師の方が偉そうですネ!?)に入門して松之丞、12月に二ツ目に昇進、それからの活躍は皆様ご存知の通りです。そして、師匠の松鯉と伯山が共存するのは何ンと、99年ぶりです。これも凄い事ですよネ!?この伯山の代々は、全てが名人と言われています。六代目のこれからの活躍が楽しみです。

下段に神田伯山の系図を記します。



各伯山を簡単に紹介しますと

初代 本名齊藤定吉、師の伯龍が神田派を興し、弟子伯山はその頭となる。十八番は「徳川天一坊」、二代目、本名玉川金次郎、得意は中国の古典「水滸伝」、後に弟子小伯山に三代目を譲り「神田まつり」を洒落て、初代神田松鯉を名乗る。三代目、本名岸田福松、侠客伝の第一人者で「次郎長伯山」浪曲の二代目広沢虎造もこの次郎長伝を参考にしている。五代目、本名岡田秀章、幅広い芸を持ち「大菩薩峠」「吉原百人切」「天保水滸伝」など、本来は四代目だが、二代目伯山の実子で兄弟子の二代目松鯉に敬意を表し四代目を譲り、五代目として伯山を襲名。

資料参考 「東京かわら版」

同じ話芸で在りながら、落語と講談(講釈)の違いは!?と訊かれますが、私は、先ず講談には落げが無い事、又多くの講談が勧善懲悪で在る事、落語は必ず善が勝つとは限りません。「黄金餅」の様に他人のお金を横盗りして餅屋を始めたら、大繁昌したテな噺も在ります。そして定席では必ず釈台と張り扇を使う事ですかネ。



新神田伯山

出典：<http://ord.yahoo.co.jp/>

落語との繋がりですが、ほぼ同時代に誕生して、講談は読み物、落語は語り物として発展して来ました。そんな関係で、講談を落語にした噺も幾つか在ります。まずは「お白洲もの」と言われる大岡政談など、落語から講談に移したのが「小間物屋政談」、講談では「万両婿」として演っています。では今回は積根多の中で、武士(浪人)の出てくる「柳田格(角)之進」を取り上げてみたいと思います。この噺は志ん生が講談から移したと言われております。古今亭の噺です。やはり志ん朝ですかね。

彦根藩井伊家の家臣で柳田格之進、この人は実に清廉潔白な人柄で、余り正直な為(ひ)に他人(ひと)から疎(うと)まれ、謠言(ざんげん)により浪人の身となり、娘きぬと二人、江戸の裏長屋で貧乏暮らし、碁会所で知り合った(おおだ)の主人萬屋源兵衛の誘いで萬屋の離れで二人っきりで碁を打つ様になって八月の“月観の宴”、二人は途中で抜け出し離れで碁を打って再び酒席へ戻って談笑をして、帰りには娘きぬ用にと土産まで貰って柳田は良い心持ちで長屋へ帰る。ここで萬屋で事件発生。番頭が主に渡した(きんす)金子五十両が無い！主も何処へ置いたか覚えていない。トッ、番頭が「柳田様がお持ち帰りになったのでは？」「バカな事を言うな」と主が強く止めるのも聞かずに翌朝柳田のもとに「柳田様、当家で五十両のお金がなくなりました。ご存知ありませんか!？」柳田が知らぬと言うと「それではお上に届けます。柳田様も何かとお取調べが在るかも知れません」「何！お上に届け出るか。それは困る。では五十両(わし)儂が出そう」と明日の昼過ぎに取りに来る様に伝え、家名(きず)に疵が付くのを恥じて、腹を切ろうとするのを娘に止められ、娘の孝心で吉原に身を売って、翌日尋ねて来た番頭に金を渡す際「これ番頭、儂は決して盗ってはおらん、その五十両は必ず出て来る。その時は何んと致す!？」「へい、その時は私の首と主源兵衛の首を差し上げます。」「その言葉忘れるで無いぞ」。金を持ち帰った番頭を主はキツク叱り直ぐに長屋に行くが「他に(た)に移り住むものなり」と書き置きを残して不在。お金が紛失したのが八月、その年の大掃除の日、離れの額の内側から主が置き忘れた五十両が現われ店中大騒ぎ、とにかく詫を言わなくてはと総動員で探すが見付からず、年も明けて番頭が頭を連れて年始廻り、雪の中湯島の切り通しを歩いていると、下から一挺の駕籠、脇に立派な(みなり)身形のお武家様、坂の中ほどで擦れ違う時「そこに参るのは萬屋のご支配徳兵衛殿ではないかな!？」そこに立っているのは帰参が叶った柳田格之進！番頭は腰を抜かさんばかりに驚いて、今までの(いきさつ)経緯を話して頭を下げるが、柳田は「それは目出度い、実に佳き日(おとこのこ)で在る。明日萬屋宅に参るによって、兩名の者、首を洗って待っておれ」当日、柳田は手土産を持って萬屋へ、兩名をその場に並ばせて、刀を抜き首を刎ね様とするが、床ノ間の基盤を真ッ二ツ、「主従の情に触れ切る事が出きぬ、きぬ赦してくれ」そこで五十両の出処を聞き直ぐに身請けをして、この番頭と娘きぬが夫婦養子となり、生れた男児(おとこのこ)に柳田の家督を継がせて、目出たし、目出たし。テな訳で落げは在りません。今の時代では、余程実力が無いと理解出来ない噺ですネ。次回は何を書きましょう。



「湯しま天神坂上眺望」 広重画 名所江戸百景より
出典：<http://ginjo.fc2web.com/31yanagidakaku/yanagida.htm>